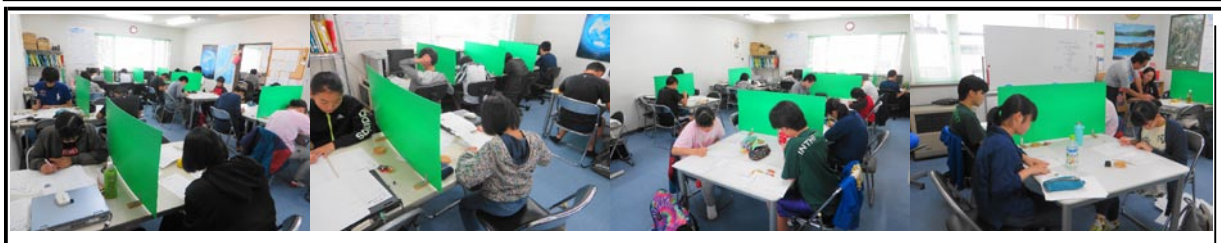
進学通信
ステップゼミナールだより
ホップ・ステップ
10 October
第 144
2018 年 10 月 1 日発行

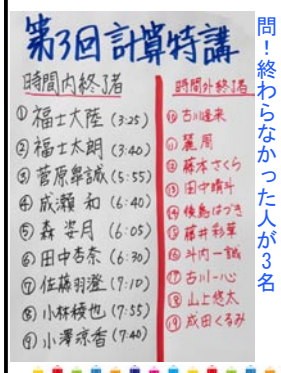


9/1 第３回計算特講を実施、午前８時から午後５時までがんばりました。

昼食時はうるさい位元気

高専生の村上君が丸付けを手伝って

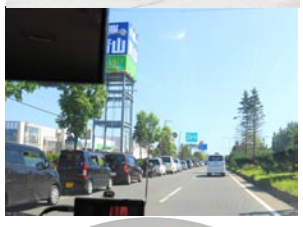
この日は高校生も長時間勉強しました



第３回計算特講、３年生は７００問、２年生は５００問、１年生は３８０問！終わらなかった人が３名

9/8 学力Ａテスト対策
12 日実施予定が地震の影響で 19 日実施に変更！定期テストも･･･

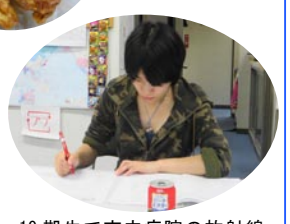
9/6 未明の地震で前代未聞の北海道全域が停電！至る所で長蛇の列。星空は良かった！



９月も差し入れやお土産をたくさん頂きました、ありがとうございました。

21 期生で旭川教育大学４年生の阿部さん。公務員試験の面接試験を受けに。

21 期生で群馬県立女子大の増山さん。今回は芸術館で学芸員の実習でレポート作成中！

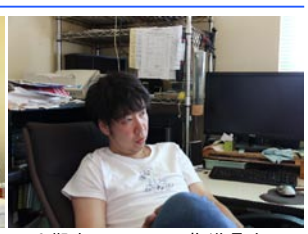


19 期生で市立病院の放射線技師、住川さん。この日はまる付けを手伝ってもらいました。

18 期生で慶應大学院の新田君が卒業前に顔を見せてくれ、いろんな話を聞く事ができました。

17 期生で日立製作所の医療器部門に勤務する富樫君、遅い夏休みで１年ぶりの再会でした。

14 期生の工藤さんと根内さん。工藤さんはセブ島で２ヶ月の英語留学。その後１年間海外へ行くと。

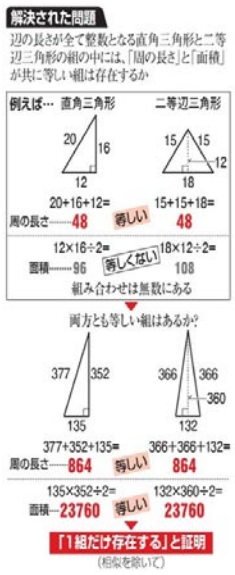


6 期生でＫＤＳで指導員をしている鈴木君が久しぶりに。卒業生の多くが彼の教習で免許取得。

◆世界に一つだけの「三角形ペア」発見 慶應大学大院生２人証明◆

世界に一組だけ、特別な関係を持つ三角形が存在する――。図形を扱う数学の幾何学に関する定理を、慶応大の大学院生２人が証明した。定理自体は小学生でもわかる内容。２人は「数学の奥深さや面白さを楽しんでほしい」と話している。

証明に取り組んだのは、幾何学の問題で、「辺の長さが全て整数となる直角三角形と二等辺三角形の組の中には、周の長さも面積も共に等しい組は存在するか」というもの。慶応大大学院理工学研究科で数学を学ぶ大学院生の平川義之輔さんと松村英樹さんの２人が昨年12月に挑み始めた。



２人はまず、三角形がたくさん出てくる幾何学の問題を、式を扱う代数方程式に変換させ、解がいくつ存在するか、という問題に置き換えた。その上で、現代数学の手法「数論幾何学」を用いて解いたところ、解が一つ存在することがわかった。

◆新田君の話しから◆

朝日新聞ＤＩＧＩＴＡＬ９月19日

18期生で慶應大学工学部で大学院２年生の新田智徳君が久々に来るという事で一緒に食事をしました。（30年で初めて塾を６時で終わらせました。）４月の時点で三菱重工に就職が決まっていて、これからは修士論文の執筆で忙しくなるんだそうです。

彼の話しの中で驚くことが二つありました。

一つは彼がドイツでの学会に参加し英語で発表し、質疑応答したというのです。大学院の周りの人たちの中にはＴＯＥＩＣ、９００点以上の人が普通にいるそうです。が、彼が持ってるのは英検４級、漢検準２級、数検３級だけで、特に英語を習ったことも無く、ＴＯＥＩＣなどの試験も一度も受けたことないという事でした。

数学はずぬけて出来ましたが英語はそれ程ではなかった印象なので、「それで出来たの」と聞くと、「まぁ何とか」と気負うところもなく淡々と。それが新田君！

彼は７年間塾にいましたので、キーボードを打つスピードは１分間に６００文字、積み重ねるという事が大事なことが良く分かります。

もう一つは就職の内定した学生たちが、その日から「転職サイト」を見ているという話しでした。卒業するのに取り敢えず確保という事なのか、いくら大卒者の就職が売り手市場とはいえ、普通ではあまり考えられないことです。

いづれにしてもこの辺の状況とは大違いです。多分世界観が違うのでしょう。皆も自分の将来、大きな視野で考え、行動するように心掛けましょう。

在籍する生徒の所属校
小学校　愛国・鳥取西・富原
中学校　美原・共栄・景雲・鳥取・鳥取西・附属・富原・別保・鶴居
高　校　湖陵・江南・北陽・明輝・高専・武修館

■ 10 月の予定 ■

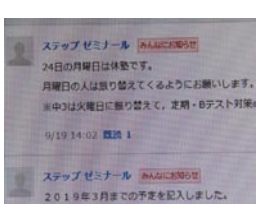
31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月
			●休塾	◆市内一斉土曜授業					■附属３年定期	●休塾	●中３生土曜特講			◆江南修旅			●休塾	●中３生土曜特講 ◆湖陵修旅		●学力Ｂテスト ■附属１、２年長復テスト			●休塾 体育の日	●休塾	●学力Ｂテスト対策		■鶴居定期	■鳥取定期		

センター試験まで あと 109 日　公立高校入試まで あと 155 日

◆塾からのお知らせ、メールだけでなく◆

先日の停電時、ＰＣの操作が出来ずメールやホームページで休塾のお知らせをする事が出来ませんでした。

そこで今回、そんな状況に備えるため、先日お知らせしたようにグループウェアーを使い、ＰＣでもスマホでも「お知らせ」と「スケジュール」の確認ができるようにしました。R-group でユーザーＩＤ「rgroup-001」パスワード「step0001」



「上から目線」6割使用　「タメロ」「ガチ」も半数国語世論調査

「上から目線の言い方をされた」のように、「ある立場からのものの見方」を示す「目線」という表現を、約6割の人が使っていることが25日、文化庁の2017年度「国語に関する世論調査」で分かった。「タメロ」など対等な力関係を表す「タメ」を使用する人も目立った。

「目線」は「使うことがある」と答えた人が全体で57.4%。60代以下では5～8割超となり、70歳以上も30.7%だった。同庁は「新しい言葉ではあるが、比較的普及、通用している」と分析している。

また、「タメ」が10～50代、本気の様子を意味する「ガチ」は10～40代でそれぞれ半数以上が「使うことがある」と回答。一方、ほぼよりも確実性の高いときに用いる「ほぼほぼ」の使用割合は全体で27.3%、予定の時期を先に延ばす「後ろ倒し」は12.3%にとどまった。

慣用句などの意味についても調査。「(借金を)少しずつ返していくこと」を表す「なし崩し」を本来の意味で理解する人は19.5%だった一方、本来と違う「なかったことにする」を選んだ人は65.6%に上った。自分の主張や考えを広く人々に知らせて同意を求めることを表す慣用句「徴(げき)を飛ばす」は、67.4%の人が「元気のない人を活気づける」意味と理解していた。

調査は今年3月、個別面接で実施。全国の16歳以上の男女2022人から回答を得た。

新しい表現を使うことがある割合(%)

	全体	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上
「ほぼほぼ」	27.3	56.6	60.5	47.4	44.4	26.9	12.0	6.7
「後ろ倒し」	12.3	9.6	17.7	16.7	16.1	15.8	10.4	6.3
「目線」	57.4	81.9	76.9	78.2	72.0	66.8	50.1	30.7
「タメ」	51.0	85.5	85.7	84.6	76.8	62.3	33.1	13.2
「ガチ」	41.0	77.1	78.9	69.7	58.5	47.8	26.2	8.9
「立ち位置」	48.5	69.9	77.6	73.9	63.7	58.2	38.9	18.6

慣用句などの意味・言い方

	17年度	07年度
【意味】		
「檄(げき)を飛ばす」		
○自分の主張や考えを広く人々に知らせて同意を求める	22.1	(19.3)
×元気のない者に刺激を与えて活気づける	67.4	(72.9)
「やおら」		06年度
×急に、いきなり	30.9	(43.7)
○ゆっくりと	39.8	(40.5)
「なし崩し」		
×なかったことにする	65.6	—
○少しずつ返していく	19.5	—
【言い方】		
・チームや部署に指図を与え、指揮する		08年度
○采配を振る	32.2	(28.6)
×采配を振るう	56.9	(58.4)
・胸のつかえがなくなり、気が晴れる		07年度
○溜飲を下げる	37.4	(39.8)
×溜飲を晴らす	32.9	(26.1)
・多くの中から、選び出される		
○白羽の矢が立つ	75.5	—
×白羽の矢が当たる	15.1	—

(注)○が本来の意味、言い方。単位%。かっこ内は前回調査

子どもの学力は「母親の学歴」で決まる…？　文科省の衝撃レポート

文科省がとりまとめた分厚い調査報告書を読み解く　8/29

小学6年と中学3年の全員を対象に、毎年4月に実施されている文部科学省の「全国学力・学習状況調査」(全国学力テスト)。それぞれの対象学年100万人以上が一斉に受ける国内最大の調査では、都道府県別の平均正答率が公表されるため、「今年は秋田県が1位」などの報道を見たことをある人は多いだろう。

しかし、テストに付随して行われる保護者対象の「アンケート調査」はあまり知られていない。じつはこちらの調査こそ、日本の「教育格差の真実」が凝縮して示されているとして、教育専門家の間ではむしろ注目されている。

その調査はお茶の水女子大らの研究者が文科省から委託され、小6と中3の児童生徒の保護者から、無作為に10万人規模を抽出。保護者の年収や学歴といった家庭の社会・経済的背景を指標化して4階層に分け、テストの平均正答率との相関関係を分析している。

これまで13年度と17年度に実施され、その調査結果からは「親の収入や学歴が高いほど児童生徒の学力が高い」といった傾向が浮かび上がっている。今年6月に公表された17年度の調査結果でも、学歴や収入が最も高い世帯は、最も低いそれらの世帯と比べ、たとえば基礎的な数学A問題では24.2ポイントもの差が付いており、エビデンスで裏付けられた。

その一方で、学歴や年収が高くない世帯でも「日常生活で本や新聞に親しむことや、規則正しい生活を促している家庭では好成績の傾向がある」といったことが明らかになっている。規律正しい生活と好奇心、勉強への一定の意欲があれば、学習で工夫を加えれば、家庭環境を克服できる可能性が示された。

こうした調査報告書の概要は報道済みで、保護者の感覚でもそれほど違和感のない内容だろう。

しかし、文科省がとりまとめた分厚い調査報告書を読み解くと、新聞では報じられていない内容がふんだんに記載されている。そこからは、児童生徒の学力と家庭環境との「知られざる関係」がより明確に浮かび上がってくるのである。

父親の学歴より、母親の学歴との関係性が強く出る。たとえば「家庭環境と子供の学力」の章は、「200万円未満」から「1500万円以上」まで100万円刻みで世帯年収と学力の関係を分析している。年収の高さに比例して正答率の高さも増しているが、注目されるのは、ある程度の高さの年収世帯になると「年収と学力」が直線的な関係を示さなくなることだ。

たとえば、「年収1200～1500万円」世帯の生徒の平均正答率は、「年収1500万円以上」世帯に比べて、国語A・B、数学A・Bのすべてで上回っている。必ずしも世帯年収が高いほど正答率が高くなるとは限らない一例といえよう。

さらに興味深いのは、保護者の学歴と児童生徒の学力との関係だ。保護者の学歴が高いほど児童生徒の学力が高い傾向がみられるが、より詳しく見ると、児童生徒の学力は父親の学歴より母親の学歴との関係性がより強く出ていることだ。

中3の数学Bでは、父親の最終学歴が「高等学校・高等専修学校」のケースだと正答率は44・1%、「大学」になると56.55%に上り、その差は12・4ポイント。一方、母親の最終学歴が「高等学校・高等専修学校」だと43.4%、「大学」になると60.0%になり、差は16.6ポイントに広がり、父親の学歴にともなう差より拡大していることがわかるのだ。

親の単身赴任と子の学力との興味深い関係性

17年度調査では新たに保護者の単身赴任と児童生徒の学力との関係も対象となった。単身赴任世帯は各学校で一定割合含まれることから新項目になったとされるが、結果は「父親が単身赴任している子供の学力は、そうでない子供より高い」という分析が導き出された。

データでみると、小6と中3の全科目で、「父親単身赴任」の児童生徒の正答率がそうではないケースを上回り、特に、中3の数学Aでは3.9ポイントの差がついた。

一方、母親が単身赴任しているケースでは、逆の結果がでた。母親と同居しているケースに比べて児童生徒の正答率は10ポイント程度低くなり、とりわけ中3の国語Bでは52.1%にとどまり、72.5%の同居ケースに比べ20.4ポイントも差が付く結果となった。

詳細な分析説明がないためデータの意味づけは不明だが、さきほどの母親の最終学歴と学力との関係と合わせて考えれば、子供の学力に対する母親の存在の影響力をうかがわせて興味深い。

父親は遅く帰ってきたほうが、子どもは伸びる！？

「保護者の帰宅時間と学力」という調査も親にとっては気がかりなところだろう。結論から言うと、父親については22時以降の帰宅(早朝帰宅を含む)という家庭の子供の学力が最も高いことが明らかになった。

たとえば、小6の国語Aでみると、父親の帰宅時間帯別の正答率は「就業していない」(68.9%)、「16時より前」(72.0%)、「16～18時」(72.4%)、「18～20時」(74.6%)、「20～22時」(77・0%)、「22時以降」(77・9%)、「交替制勤務などで帰宅時間が決まっていない」(72.8%)。帰宅時間と正答率の相関関係を示しただけで、踏み込んだ分析は示されていないが、こうしたデータだけみれば、「父親の不在により、子供が自宅で勉強に集中できる環境がある」とも読めるが、いかがだろうか。

ただし、こうしたデータを単純に鵜呑みにすることはできない。たとえば、国語Aの正答率について、年収や最終学歴など家庭の社会・経済的背景を指標化して4階層(Lowest、Lower middle、Upper middle、Highest)別にみると、遅い帰宅時間のほうが若干高いが、父親の帰宅時間と学力との間に明確な関係はみられなくなる。社会・経済的背景がよく似た世帯の子供には、それほど学力に違いがないことが浮かぶ。

家庭の蔵書数と学力との関係もおもしろい。漫画や雑誌、子供向けの本を除いた蔵書が多いほど、子供の学力が高い傾向が示された。特に、国語より算数・数学の正答率で差が開く傾向が伺える。中3の国語Aでは「0～10冊」世帯の生徒の正答率は70・4%だったのに対し、「501冊以上」は85.4%で15ポイントの開きがあった。

一方、数学Aでは「0～10冊」が55.0%、「501冊以上」は75.7%となり、20.7ポイントもの差がついた。家庭にある子供向けの本と学力の関係でも、冊数が多いほど学力が高くなる関係がうかがえた。

全国学力テストに付随する保護者対象のアンケート調査結果は、巷間言われる「金持ちの子供は学力が高い」という言説をデータである程度裏付けるものであり、高収入と高学歴の親の子供が同じように高収入と高学歴という同じコースをたどり、教育格差が経済格差を固定化させ再生産するという見方につながることはある程度説得力があるのかもしれない。

しかし、ここで示されるのは家庭環境と学力の相関関係であり、必ずしも因果関係ではない。公教育の役割は、経済格差の拡大を招きかねない教育格差の是正・平準化にあるはずだ。